

第 98 回 全国大学獣医学関係代表者協議会記録

日 時 平成 25 年 3 月 27 日 (水) 10 : 00 ~ 13 : 30

場 所 東京大学農学部 3 号館 4 階教官会議室「教授会室」

出席者 (会 長) 伊藤茂男
(北 海 道 大 学) 稲葉 睦、橋本善春
(帯 広 畜 産 大 学) 古岡秀文、猪熊 壽
(岩 手 大 学) 橋爪一善、板垣 匡、佐藤 繁
(東 京 大 学) 尾崎 博、辻本 元、中山裕之、九朗丸正道
(東 京 農 工 大 学) 田谷一善、下田 実、渡辺 元
(岐 阜 大 学) 杉山 誠、北川 均、海野年弘
(鳥 取 大 学) 澁谷 泉、竹内 崇、村瀬敏之
(山 口 大 学) 岩田祐之、佐藤晃一、森本將弘、田浦保穂
(宮 崎 大 学) 池田正浩、後藤義孝
(鹿 児 島 大 学) 三角一浩、宮本 篤、川崎安亮
(大 阪 府 立 大 学) 久保喜平、玉田尋通、山手丈至、笹井和美
(酪 農 学 園 大 学) 谷山弘行、林 正信、田村 豊、竹花一成、山下和人
(北 里 大 学) 高井伸二、宝達 勉、小山田敏文、渡辺清隆、佐藤久聡
(麻 布 大 学) 政岡俊夫、和田恭則、浅利昌男、村上 賢、土屋 亮
(日 本 大 学) 河野英一、杉谷博士、野上貞雄、上地正実、丸山総一
(日 本 獣 医 生 命 科 学 大 学) 今井壯一、新井敏郎、河上栄一、尼崎 肇、神谷新司、小山秀一、田崎弘之、
左向敏紀
(特 別 出 席) 文部科学省 高等教育局専門教育課 内藤敏也、児玉大輔
農林水産省 消費・安全局畜水産安全管理課獣医事担当 荻窪恭明
社団法人日本獣医師会会長 山根義久、専務理事 矢ヶ崎忠夫
公益財団法人大学基準協会大学評価・研究部 審査・評価系主幹 橋本孝志
(事 務 局) 東京大学 : 久和 茂 (事務局長)、堀 正敏 (総務)、内田和幸 (広報)
日本獣医生命科学大学 古山泰二、及川夏都美

以上 73 名

開会に先立ち、配布資料の確認が行なわれ、本日の議事日程の確認が行なわれた。

農林水産省消費・安全局畜水産安全管理課獣医事班 荻窪恭明課長補佐、社団法人日本獣医師会 山根義久会長、公益財団法人大学基準協会 橋本孝志主幹より来賓の挨拶、文部科学省高等教育局専門教育課 内藤敏也課長より講演の後、議事に入った。

議 事

I. 確認事項

1. 平成 25 年度各大学代表者一覧、各種委員会・ワーキンググループ等委員長・座長・幹事一覧及び出席者名簿の確認について

平成 25 年度各大学代表者一覧に基づき連絡先等、各種委員会・ワーキンググループ等委員長・座長・幹事一覧及び出席者名簿の確認がなされた。

II. 報告事項

1. 国公立大学獣医学協議会報告

尾崎会長より、次のとおり報告があった。北海道大学と帯広畜産大学、岩手大学と東京農工大学、山口大学と鹿児島大学の形態は違うが共同教育課程がスタートした。岐阜大学と鳥取大学が共同教育課程の協定を結んだ。大阪府立大学に獣医学研究設立準備委員会が出来た。これは、大阪府立大学と大阪市立大学の統合に伴う獣医学の改革ということで報告があった。

文部科学省の国立大学改革強化推進事業として138億円の補助金で、基幹校が帯広畜産大学で、北海道大学、山口大学、鹿児島大学の4大学で申請を行い、採択になった旨報告があった。また、補助金のほとんどの部分が獣医学教育に付いたと聞いている。そのため、国立大学の中でこの4大学は大きく変わっていくことになる。

その他で議論したことは、共用試験と国家試験の関係についてどのようになっていくかを話し合った。私立大学では自己点検・自己報告を実施しているが、国公立大学でもそれをやるべきだという提案があった。これについては、実際に動いていないが、午後に話し合う予定である。

2. 私立獣医科大学協会協議会報告

政岡会長より、次のとおり報告があった。9月13日午後に私立獣医科大学協会協議会を開催したが、私立獣医科大学協会加盟の大学には課題があるため、11月6日(火)に拡大幹事会を開催し、3月26日(水)に臨時拡大協議会を開催し、秋以降3回の会議を開いている。9月の協議会の議題で一番は、国立大学が構築しているeラーニングについて、私立大学に提供してもらう提案があったが、そのシステムについて各私立大学がどのように利用出来るのかを検討した結果、システム面とその後の維持管理の経費面を勘案した結果、断念せざるを得ない結論に至った。私立大学はeラーニングのシステムを構築しないのかとなると、各私立大学が持っているeラーニングシステムでどのようなコンテンツが出来るのかについて協議することとした。酪農学園大学谷山学長を中心として、特別委員会を設立してコンテンツの充実について協議していくことが9月13日の協議会で決まっている。

11月6日の拡大幹事会において、①参加型臨床実習への対応と各大学の取組について、②附属動物病院の教育機能充実と課題、③獣医学教育研究会への取組への対応を協議している。それと並行して、モデル・コア・カリキュラムが平成28年に改定されることは決定しているので、次期モデル・コア・カリキュラムへの対応として、私立獣医科大学協会の中にも、現行のモデル・コア・カリキュラムをブラッシュアップする委員会を立ち上げた。日本大学の杉谷教授を委員長として、私立大学内で検討して、全国協議会にも諮っていくこととした。

動物看護師の統一試験が始まるが、今まで動物科学系の教育の中で受験資格があったが、今般受験資格がなくなった。それに対して動物科学系の分野を持っている3大学はどう対応するのかについて情報交換を行った。

3月26日の臨時拡大協議会において、9月の全国協議会で課題となった共用試験に関連する機構の設立の件について、10月に吉川前会長から各大学代表者宛に依頼文が発送され、その依頼文に対して、各私立大学がどのように対応が出来るのかの情報交換を行った。各大学の長としては、機構の設立に際してかかる経費は応分の負担をすべきという理解を得ているということだった。内容について、なぜそこまでの経費を出さなければならないかというしっかりした資料を作成してもらい、法人に報告出来るような資料を作成してもらいたい。基本的には受益者負担なので、各大学の経費負担は確認されているが、内容についての資料作成が求められている。機構そのもののアイデアは分かるが、機構でなければならないのかという意見も出ている。

III. 協議事項

1. 第97回全国大学獣医学関係代表者協議会記録(案)の確認について

伊藤会長より、第97回全国大学獣医学関係代表者協議会記録(平成24年9月13日開催)の確認が行われ、承認された。

2. コアカリキュラム検討小委員会報告

尾崎委員長より、次のとおり報告があった。コアカリ委員会ではメール会議で次のことを確認した。

1) 現在インターズー社から定価 1,000 円で販売されている冊子体「獣医学教育モデル・コア・カリキュラム」の扱いについて

平成 24 年度版「獣医学教育モデル・コア・カリキュラム」を無料で公開してほしい要望が根強くある。閲覧は出来るが印刷は出来ない PDF ファイル形式でホームページ上に公開することとした。

2) 「獣医学教育モデル・コア・カリキュラム」を電子書籍として販売することについて

現在の冊子体の「獣医学教育モデル・コア・カリキュラム」を電子図書として販売することも必要であろうということで、定価等をどのように設定するかは、今後委員会の中で調整していくこととした。共通テキストが電子化される中で、「獣医学教育モデル・コア・カリキュラム」も電子化すべきだということです。紙媒体と電子図書と無料 PDF という 3 本立てで「獣医学教育モデル・コア・カリキュラム」を公開していくことになる。

3) モデル・コア・カリキュラムの小改訂について

コアカリ準拠の教科書の編纂が進むにつれ、作業をしていく過程でコアカリの小改訂を行いたいという要望が多数出て来ている。前回の全国協議会で、新規項目の追加など大幅な改訂でなければよいとアナウンスしてある。橋本先生から執筆者に連絡して改訂の箇所を確認して、それらを追記・修正した段階で、コアカリの改訂版を無料 PDF あるいは有料電子図書で公開していくことになる。

3. 共用試験委員会報告

高井委員長より、次のとおり報告があった。配布資料に基づき、2) vetCBT 問題内容検討部会報告を杉山先生から、3) vetOSCE 準備小委員会報告を北川先生から、4) 獣医学共用試験 CBT の開発状況を遠藤先生から、広報小委員会報告を澁谷先生から説明してもらいます。そして、科研費基盤研究(A)活動報告として昨年実施したアンケート調査の中間報告として資料が添付されているのでご覧いただきたい。

1) 共用試験委員会活動報告について

高井委員長より、第 1 回から第 3 回までの獣医学共用試験委員会議事録が添付されている。第 1 回・第 2 回は昨年報告済だが、平成 24 年度各委員会の経過報告と次年度をどうするかを含めて検討した。科研費を原資としているので、次のステップとして平成 25 年度実施目標等について検討して、申請時には関係の代表者の方に相談させていただきます。今年度一番力を入れている vetCBT 問題内容検討部会報告を杉山先生からお願いします。

2) vetCBT 問題内容検討部会報告について

岐阜大学杉山先生より次のとおり報告があった。

資料 2-1 「vetCBT 問題内容検討部会委員一覧」に基づき、平成 25 年 1 月 16 日現在の最新版で、150 名の先生方に問題を精選・修正して作ることになる。7,718 題が出題してもらった問題数になる。項目として出題数/到達目標を設定している。これは、到達目標に対してどのくらい出題数があったかを計算したものである。臨床の方で数は多いが、総論のみとなっているので、多いというのは参考にならないが、少ないというのは教える教員が少ないということが反映されていると思われるので、一つの参考となる。好きなように作ってもらったらこのようになったということで、教員の偏在があると考えられる。このような状況で、問題精選をどのようにしていくか、前回説明したように WEB 上で論文の査読に似た形でシステムを開発してきた。

資料 2-2 「vetCBT 問題精選システム説明会」に基づき、3 回の議事録を見れば分かるように 8 月にシステムは出来上がっていたが動かず、2 月になって動く目途が出来たので、2 月 26 日の北海道大学を皮切りに、3 月 12 日の鳥取大学を最後に半月かけて各大学で説明会を実施した。精選作業に

携わる先生は150人で、出題する獣医の先生は650人程しかいないので、3~4人に1人はこのような作業に携わることになるので、作業する先生だけでなくオープンな形で説明会をさせていただいた。急な依頼のため作業する先生だけの大学とか、参加出来なかった先生方がいらしたのでお詫び申し上げます。また、説明会には多くの先生方の協力をいただきありがとうございました。システムも開発途上のものであるので、質問を受けながら進化した部分もある。また、Q&Aで纏めているので、各大学の部会責任者の方々にQ&Aを配信しているので、その方を通じて教員の方々に配布するよう依頼している。ありがたい意見をいただいて、システムをより良くすることが出来たし、課題も見えてきた。その時説明した資料4「vetCBT 問題精選修正マニュアル v2.1」、資料5「CBT 問題精選プログラム説明プレゼン資料」が配布されている。

資料6「vetCBT 問題精選修正作業 v22 プレゼン」に基づき、最初に各大学で説明したもので、どのように説明したか説明させていただきます。共用試験がなぜ必要かから始まり、共用試験委員会の組織、CBT・OSCE が目的論でやっているのではないことが示されている。問題を精選するためにはどのようなことが必要か、1問1分でシンプルな表現に、これは作成の時に非常に必要なことなので説明した。精選・修正システムの考え方だが、科目委員1・2、科目主任に評価をしてもらい、レビューしたものを修正記録と共に科目副責任者と科目責任者で判断していくことになる。その後、どのように評価され問題が出来上がったか分からない形になっているので、守秘の程度が厳しくない状況でやれる。最後ランダムに問題を出すので、そのような形になることが考えられる。問題だが、学生に問題を解かせて良問かどうか判断していくという二重のチェックがかかっていることを説明した。更に重複問題をどうするのかのスケジュールが書かれている。説明会が終了したのでこのシステムは稼働している。早いところだと科目主任の3段階目に入っている問題もある。いくつ指摘はあったが、今のところ順調に進んでいる。問題数が多い科目があり、そういうことも問題なので、100題に限らせてもらった。今回は、システムが上手く稼働するかどうか主眼を置いて進めている状況です。

資料3「CBT 問題精選プログラムマニュアル ver6.1」に基づき、精選サイトのURLには、作業する以外の人も入れるようにしている。P10のダミーの問題を使って自由に操作してもらおう形で、遠藤先生に作ってもらいました。どのようにして問題が流れていくかを理解していただく形で、次の問題精査の時に生かしていただきたいと考えている。CBT 問題精選修正作業はこのように流れている。

3) vetOSCE 準備小委員会報告について

資料7「vetOSCE 実施要項案 ver6」に基づき、岐阜大学北川より次のとおり報告があった。

(1) 各大学の vetOSCE 担当者

各大学の vetOSCE 担当者を決めていただき、30日に第1回の担当者会議を行う予定である。その内容を説明して、具体的に動き始めるスケジュールになっている。

(2) vetOSCE の準備

事前実習の準備（各大学で準備する）

1) 医療面接

vetOSCE は実習なので、いきなり試験を行うと厳しいため、事前に実習をしておいてその内容を試験することになるので、事前実習を準備していただくのが良いと思っている。3年後に本格実施となると、そろそろ準備を始めて行く必要がある。まずやらなければならない医療面接の項目を立てた。ほとんどの大学が問診という形でやっていると思う。それをきちんとした形でコミュニケーションスキルトレーニング実習としてやって行く。DVDを作る予定であるが、あくまでも移行期であって、模擬クライアントによる医療面接実習を行った方が良いので、その準備をしていただければと思っている。

2) 実技試験

普段行っていることを試験するというので、イヌ身体検査（視診、触診、聴診）、採決時の保定、採決、ウシ身体検査（視診、触診、聴診）、検温、聴診、無菌操作（手袋、ガウン装着）、皮膚縫合・結紮等各大学で行っていることを試験する。どういう形で行うかは、標準的な実習が出

来ていれば問題ない。

(3) vetOSCE の準備

5 室計画したが、実際難しいので、面接、犬身体検査、牛身体検査、無菌操作・皮膚縫合の 4 室とし、効率を高めた。面接、身体検査 1、身体検査 2、無菌操作か皮膚縫合のいずれかを選択することとした。5 項目の準備をする必要がある。大学の判断にもよるが、所要時間を考えると 1 レーン 10 分で動いていくとすると、30 名の学生で 5 時間半かかるが、効率よく行えば短縮できると思う。所要時間は人数にもよるが、5 時間半から 7 時間かかる。それに応じてレーン数を増やしていく形になる。どのように行うかは各大学の計画に任される。合計すれば全国で 33 から 36 レーンになる。

- ・必要な役割と人員について、当該大学教員、事務職員でも可、実施機構から派遣に区分し、試算すると次のとおりとなる。

実施機構派遣：評価者 2 名、標準クライアント 2 名、計 4 名

当該大学教員：全体の管理者 1 名、評価者 4 名、補助者 4 名、計 9 名

当該大学事務職員：6 名

- ・医療面接は試験なので、各大学が日頃行っている面接より、全国的に統一した模擬クライアントが必要で、どのくらい必要かはこれから交渉となる。
- ・実技について、シミュレーターを開発した。牛と動物をという要望が前回シンポジウムで意見として出て、全国統一的な試験を行うため、公平性を考えると犬のシミュレーターと牛のシミュレーター、更に皮膚縫合の評価を行う 3 個のシミュレーターを考えている。資料 7 の終わりの「牛シミュレーターの開発」で、医学で実施しているバイタルサイエンスベビーという、心音、心拍、呼吸数を計れる機能があり、これを組み入れることにより犬と牛のシミュレーターの作成を考えている。皮膚縫合についても、すでに機械があるのでそれを使用していくことを考えている。ただ、皮膚の感触が硬いというので、柔らかいものを用いることで、皮膚縫合のシミュレーターを担当者会議の時、実物を提示して実施してみたいと思う。
- ・評価者の養成について、委員会を設けて実施していく構想である。

各大学で準備することがあるためよろしく申し上げます。

4) 獣医学共用試験 CBT システムの開発について

酪農学園大学遠藤より次のとおり報告があった。

資料 10「獣医学共用試験 CBT システムの開発について」に基づき、CBT システムというのは、問題を収集して、現在行っている問題精選を行い、実施するまでの形であるが、徐々に開発が進んでいる。問題収集システムは、2012 年度に収集作業が終了し、2013 度に改訂版を実施予定、2014 年度に安定版として完成予定である。問題精選システムは、改善しながら稼働中で、点検については後の事になるが、2013 年度から実際に使用する段階になるのが、CBT を実施するシステムです。ここまでの開発で明確になってきたことは、専攻する分野での開発費に比べて、大学数が限定されている獣医系では開発費は限られていて、効率よく使いやすいシステムを作っていくためには、先生方の意見をいかに迅速に受け入れて行くかということが分かってきた。来年度からトライアルが始まる CBT の実施システムについても、同様にそれぞれのメリット、デメリットを提示して様々な意見をいただきながら、実施していく中で改善をしていくのが、最も効果的であることが予想されている。現段階で委員会で選ばなければいけないことは、CBT の実施システムについては開発方式として、e ラーニングを原型として開発していく方式を採用するか、CBT 試験に特化した仕組みにするか選んでいく必要がある。それぞれの方式の長所、短所を記載しておいた。こういった選択肢においては、出来るだけ明快な形で提示したいと思っている。それぞれある程度の原型が出来ているので、次頁の e ラーニング採用方式と独自開発方式が示されている。いずれを採用にしても、先生方にとって負担が少なく、新たな機器が先行する医学・薬学では想定していなかった Ipad などのタブレットの普及、また当時想定出来なかったスマートフォンを持っているとカンニングが出来るという、新たな社会状況に対して対応するか、ということ踏まえながら進めて行きたい。

5) 広報小委員会

鳥取大学澁谷より次のとおり説明があった。

広報委員会では共用試験の管理運営を行っているが、先生方から頂いた質問、意見を纏めた「獣医学共用試験Q&A」の部分を、見やすく分かりやすく更新しているのでご覧願いたい。

4. 共通テキスト編集委員会報告

橋本委員長より、次のとおり報告があった。資料 4「獣医学共通テキスト編集状況一覧」に基づき、現時点での状況を説明すると、既刊が9教科、編集進行中が41教科、編集計画中が1教科、合計51教科が同時進行中である。刊行済みの共通テキストが9教科は、獣医解剖・組織・発生学、獣医生理学、獣医生化学、獣医疫学、動物行動学、臨床行動学、魚病学で、編集代表者、ページ数、刊行日、価格、電子化への対応、出版社名を纏めてある。4月に獣医薬理学、獣医毒性学が刊行予定である。刊行済みは動物行動学、臨床行動学、獣医解剖・組織・発生学というように順次出版される。今回、出版社ごとに纏めてみた。今回、6社から出版されるということで協力を得ている。朝倉書店が6教科、インターズーが3教科、学窓社が3教科、臨床系が多い文永堂が18教科、近代出版が4教科、緑書房が7教科ということで出版される。図書の電子化も進めていて、昨年2回出版社の方と相談して、テキストの電子化について依頼している。ほとんどのテキストは対応可能ということで、モデル・コアカリキュラム同様改訂が必要だが出来るということです。

電子書籍サイトVarsity ebooksという各端末からダウンロード可能なシステムなので、これから検討も必要だがこのような形で出来たらと考えている。平成25年度末までには、大方の教科書が出版可能ということを知らせて終わらせていただきます。

尾崎：この電子図書は3月21日よりオープンしており、先生方は決裁方法Bで、公費で電子図書の購入は可能となっている。

5. 動物診療施設委員会報告

辻本委員長より、次のとおり報告があった。

(1) 全国大学動物診療施設運営協議会規程の改正について、

平成24年9月16日開催の協議会において規程の改正を行い、全国大学動物診療施設運営協議会の開催を年1回にすることとした。また、秋を全国大学動物診療施設運営協議会、春を全国大学動物診療施設長（病院長・センター長）会議としていたが、施設長会議を廃止して運営協議会を年1回開催していく予定である。次回、岐阜大学主催の学術集会期間中に第65回全国大学動物診療施設運営協議会を開催予定である。内容的には、各大学がどのように動物診療施設を運営しているかの情報交換及び情報の共有している状況にある。

(2) 役員改選について

前会長佐々木先生から辻元（東京大学）が今年度から引き継ぎ、副会長として小山（日獣大）、西村（東京大学）に仕事をしてもらっている。

(3) 学部教育における参加型臨床実習ガイドラインの全国的な進捗状況について

参加型臨床実習と動物診療施設は密接な関係にあるので、ガイドラインを纏める作業をしてきた。水準1、水準2、水準3のレベルがあるが、それぞれの水準に関して具体的にどのような内容が出来るかを全国16大学に纏めてもらい、共通したものを作ろうという動きはあったが、各大学により実情が違うので、各16大学が各々ガイドラインを作りそれを見れる状況になっている。

(4) 参加型臨床実習の実施にあたっての問題点について

北川先生が日本獣医師会雑誌に論説として「獣医学における参加型臨床実習について」を纏めた。全国大学動物診療施設運営協議会の中で、参加型臨床実習について色々な意見が出てきたが、北川先生が纏めた論説に全て入っているのでこれを紹介したいと思う。

- ・現在、臨床教員数が不足している。診療施設が狭いという現状があるので、参加型実習をすべて診療参加形式にすることが難しい。参加型臨床実習と言っているが、動物診療施設での実習

が現実的に不可能である点がある。

- ・大学の動物病院は二次診療が主体になっている。そのため、学生実習に必須な一次診療に関する実習が難しい点がある。解決策として一つは開業の先生と協力して行う、もう一つは大学自体が一時診療を行う部門を持つということがある。いずれに関しても地域の獣医師会との連携が重要になる。
- ・産業動物診療の教員数が不足していて、フィールドを持たない大学が多い。そのような状況で個々の大学では産業動物実習が出来ないのが現実である。
- ・NOSA I が大学教育の責任を持つことは出来ないということで、教員が参加するようNOSA I の方々から言われている。学生全員が産業動物実習をするには教員数は足りないし、マンツーマンで教育することが多いので、難しい現実がある。
- ・大学が責任を持って教育を行うため、参加型臨床実習の実施拠点を形成する必要がある。それに対しては国の対応が必要である。
- ・平成 24 年度入学の学生からコアカリに準拠した場合は、平成 28 年度には参加型臨床実習の実施体制の確立が必要であり、各大学が真剣に対応する必要がある。
- ・各大学が参加型臨床実習実施のためのシステム（組織、人員及び施設）を整理しておく必要がある。

問題点として提議したが、全国大学動物診療施設運営協議会に参加している先生方は、共通した認識としている。

6. 第三者評価委員会報告

政岡委員長より、資料 5「第三者評価小委員会報告」「大学基準協会獣医学教育評価検討委員会名簿」に基づき、次のとおり報告があった。平成 24 年 9 月 13 日開催の第 97 回全国協議会の後、吉川会長から種々の文書が配布され、その文書によって各大学の意向を確認した上で、11 月 9 日に吉川会長達と大学基準協会を訪問し、大学基準協会の方で第三者評価の検討を依頼してほしい旨の依頼書を渡した。その結果、平成 24 年 11 月 30 日付で大学基準協会から、協会内に検討委員会を設置する旨の回答が届き、12 月 2 日付で各大学代表者に通知した。このように経緯が進んでいて、今後の取り組みについては、平成 24 年 10 月 15 日付で吉川会長から各大学代表者に送付された説明文の内容に添って、この小委員会は大学基準協会に設置される検討委員会との連絡を密にとり、情報交換に努めるように記載されているので、当該小委員会の再構成を図り活動していきたいと思う。どのように再構築を図るかは、各大学の代表者にこの小委員会に参加してほしいと思っているが、2 月に各大学代表者にメールで確認したが、代表者もしくは代表者が推薦した先生を以てこの小委員会を構成したいと思っている。活動経費がないため、小委員会が構成されてもメールによるやり取りになると思う。この提案を了解してもらいたいと思う。その後、大学基準協会の方でどのような動きがあったかは、大学基準協会内に「獣医学教育評価検討委員会」の設置が準備され、委員長に東京大学中山裕之が就任し、各委員の先生方には大学基準協会の規程に基づき依頼がなされた。中山先生の方から報告と説明があると思うが、委員の選出に当たり依頼したことは、獣医師会の中に設置されていた委員会、全国協議会の中の小委員会、文部科学省の獣医学教育改善・充実に関する調査研究協力者会議の活動経緯を踏まえ、岐阜大学石黒直隆、鹿児島大学三角一浩、大阪府立大学小崎俊司の 3 名には委員に参加してほしい旨要望していた。今回名簿に入っているため、要望が受け入れられたと考えている。

中山獣医学教育評価検討委員会委員長より次のとおり報告があった。大学基準協会の鈴木典比古専務理事より、次の意向を受けた。1 番目は、基準協会で実施している専門職大学院の認証評価を検討した際の委員会の規模、獣医学の課程を持っている大学が 16 大学を考慮して、委員の数を 15 名とした。2 番目は、大学基準協会は国公私立を横断する組織のため、そのバランスに配慮することとし、大学基準協会が正会員校の大学を中心に運営されていることを鑑みて、正会員校 6 大学から各 1 名参加してもらった。3 番目は、専門分野別評価については担当の理事を配置するというこ

とです。このような意向に従い、全国協議会から3名推薦されている。日本獣医学会、日本小動物獣医学会等様々な関連学会に所属している先生方3名に参加いただいた。私は日本獣医学会代表として参加している。獣医学関連の研究機関の動物衛生研究所、国立感染症研究所、日本生物科学研究所からも1名ずつ参加していただいている。動物衛生研究所の所長が交代するとのことで未定となっていたが、内定したため依頼しようと考えている。評価の目的を考慮して、文部科学省と農林水産省の担当の方にも参加を依頼した。

委員会は4月以降月1回の予定で開催して、第三者評価の目的、評価方針、評価基準、評価の体制、それらのプロセス等について、現在実施している薬学、公衆衛生等の評価、海外の評価の内容等を参考として進めようと考えている。全国協議会において、様々な情報を共有しながら、ある程度検討項目が固まった段階で先生方にも意見を聴きながら委員会を進めていきたいと考えているのでご協力をお願いします。

7. 大学院制度小委員会報告

尾崎委員長より、次のとおり報告があった。大学院に関することは、文部科学省の「獣医学教育の改善・充実に係る調査研究協力者会議」の議論が始まるということで、吉川会長の指示で作られた委員会だが、協力者会議でまだ本格的な議論が始まっていないということで、次回以降説明したいと思う。場合によっては、ワーキンググループを作る必要があるかも知れないし、あるいは協力者会議の中で具体的にできると、この小委員会自体が必要なのかという議論もあるかもしれないので、皆様の意見を伺い会長と相談しながら判断していきたいと思う。

8. 全国共同実習事業報告

東京大学杉浦コーディネーターより、資料6「口蹄疫等家畜伝染病に対応した獣医師育成環境の整備事業（文部科学省支援）（感染症・公衆衛生分野）」に基づき、次のとおり報告があった。

(1) 平成24年度実施状況について

動物衛生研究所、日本中央競馬会、動物医薬品検査所、東京農工大学の国際家畜感染症センター、国立感染症研究所、動物検疫所、国際獣疫事務局の東京事務所の7ヵ所で開催した。主に5年生を中心とした合計43名の学生が参加した。グラフで大学別の参加人数を示しているが、大学間で参加人数に差がある。募集に当たって情報提供に協力いただきたい。

(2) 平成25年度実施計画について

現在、関係実施機関と最終調整中だが、平成24年度の7機関に加えて、農林水産省消費安全技術センターで飼料関係のプログラムを実施したいと考えている。また、九州・関東・東北地域の家畜保健衛生所にも協力をいただき病勢鑑定を中心とするプログラムの実施を検討している。最終調整を4月中には終えて募集を開始したいと考えている。全国協議会のホームページやポスターなどを通じて公表したいと考えているので、学生への情報提供をお願いしたい。

岐阜大学北川コーディネーターより、資料7「平成23年度口蹄疫等家畜伝染病に対応した獣医師育成環境の整備事業審査結果 【分野1】産業動物診療分野の全国的な臨床実習システムの構築」に基づき、次のとおり報告があった。

(1) 事業の背景と目的については記載のとおりである。

(2) これまでの取り組みについて

産業動物臨床実習はNOSA Iの実習が主であるが、各種団体があつていくつかのプログラムが走っている状態である。北海道を除くNOSA I全国の夏期臨床実習プログラムを導入して新しく作り直し、平成24年度夏期臨床実習を実施した。

(3) 平成24年度産業動物臨床実習プログラム実績報告について

本年度は一時募集申込者数は140名で、日程が合わないとか受け入れ先が希望と合わないとかで参加者は119名であった。追加募集をしたが参加者が少なかったため、次年度どうするか検討中である。(図1)

学年別の申込者数は5年生が圧倒的に多いデータになっている。(図2)

各大学別の実習参加者数は、学生数の多い私立大学が圧倒的に多く、国公立はあまりいなかったことになる。その中でも日獣大が多く、アンケートにより実習を単位認定としている大学が利用していることが分かる。(図3・4)

受入連合会別の実習参加者数は、北海道を除く全国のNOSA Iが受け入れている。各県の受け入れ可能な人数と実際に参加した人数を示している。今回は東北地方の実習参加者が少なく、震災の影響があるのかNOSA Iの先生方も分析していた。千葉県は16名に対して20名、兵庫県は14名に対して17名と人数以上に受け入れていただいた。特に千葉県は色々な実習を受け入れていただいた。(図5)

実習希望日数と実習日数は、5日と12日が多く、単位があると2週間が多くなる実情を示している。(図6)

NOSA Iから次のような意見があった。

- ・実習窓口が変わっても混乱はなかった。
- ・NOSA I職員の実習指導のための資格・認定を要望する。
- ・大学から先生が来て教えてほしい要望があった。
- ・本実習プログラムと別の実習の募集時期を同じにしてほしい。
- ・重複申し込みを避けてほしい。

大学の方で学生を教育して実習に出さないと、NOSA Iの方ではトラブルが起きるので、大学の方でも考えてほしいということである。

実習参加者から次のような意見があった。

- ・参加申込から受入先決定までの期間が長かった。受入先の決定を早くしてほしい要望があったが、平成25年度は早く出来ると思う。
- ・移動費・宿泊費が負担だった。宿泊費の負担が少ない場所に希望が集中した傾向が表れている。
- ・事前に資料がほしい。
- ・複数の診療所で実習をしたい。春期にも実施してほしい要望があり、現在受入側と協議している。

教育効果を上げるため、別紙様式5の実習日誌を毎日書かせており、裏面の実習実施項目チェックリストも書かせていた。それから修了証書も発行した。

(4) 今後の取り組みについて

①産業動物臨床実習に関するフォーラムの開催について

3月29日(金)開催のフォーラムで、当事業の概要説明・実績報告等に加え、ちばNOSA I連の菅澤氏に「獣医学生実習受入れの現状と今後の方向性について」講演をいただき問題点等について議論する予定である。

②NOSA Iにおける産業動物臨床アドヴァンス実習システムの構築・運営について

NOSA I 夏期臨床実習スタンダード編・ステップアップ編がある。スタンダード編は、目的：低学年の導入実習から高学年の実践実習まで行い、単位の有無等受入側もやりにくい面があるとの要望があった。いずれにしても、実習は区分けした方が良いので、導入実習、基盤実習、参加型実習、アドヴァンス実習の、特にアドヴァンス実習の部分をNOSA Iとしては後継者を育成したい希望があり、そういう方向で纏めたステップアップ編を企画した。将来、5・6年次学生を対象に産業動物臨床獣医師を志す学生を対象として行うのがステップアップ編である。今年度基盤NOSA I等7つのNOSA Iを対象として、始めることとした。

③NOSA Iにおける産業動物臨床実習システム運営の継続について

更にスタンダード編として、今年度実施した実習も継続して実施していく。これがなくなると受入先も困るので、継続しながら実施していく。

④出前授業システムの運営開始

NOSA Iの先生にどのような授業が出来るかアンケートを実施し回答を得ている。平成25

年度はホームページにアップして、各大学の要望に応えられるようにしたいと考えている。

⑤指導獣医師認定システムの構築

NOSA Iの先生方からそのような教育を行うなら認定をしてほしい要望があり、農林水産省の「獣医学教育における獣医学生の臨床実習の条件整備に関する報告書」を基に認定するかどうか、現場の先生方や全国協議会で検討しながら進めていこうと考えている。

(5) 今後の課題について

NOSA I等との連携により導入・アドヴァン斯的臨床実習を整備してきた。コア・カリキュラムの導入に伴う参加型臨床実習に全員が参加出来る体制を構築する必要がある。NOSA Iの方にも負担をかけなければならない状況だが、大学としてどのように対応していくかを考えながら、やらざるを得ないので対応策を検討する必要があると考えている。

質問：クレームが多かったのは何年生か。低学年が実習に出ているが。

回答：導入的な内容で研修を実施しているので、低学年はあまりいない。高学年の単位がほしいという学生が多かった。将来産業動物は行わないと公言している学生がいるので、そこは大学として何とかしてほしいと思う。

9. 事務局広報委員報告

山口大学佐藤委員長より、次のとおり報告があった。全国協議会のホームページの下にコアカリのホームページ、共用試験のホームページ、共通テキストのホームページ、また全国共同事業の産業動物、公衆衛生のホームページもある。一つお願いがあり、先生方が持っている情報等を他の先生方と共有したいし、行っているというアピールになるので、やられている内容とか、次にこういう教科書が出るとか、そういうことがあれば連絡していただきたい。可能な限り掲載したい。また、共通テキストに関しては多数出てくるので、全て出版社とリンクを張って学生が見やすいようにしている。共用試験に関しては、別立てで澁谷先生の方で管理している。多くの先生が情報を求めたがっていて、学生が直に関与してくるので、進捗状況がどうなのかもあるので更新に協力願いたい。

10. 平成24年度決算について

事務局庶務・経理より、平成24年度決算の報告があり承認された。

次回開催は、平成25年9月19日(木) 午前10時から午後1時まで岐阜大学で開催される旨、確認された。

以 上